

古代四國の聚落到就いて

小 牧 實 繁

余は日本に於ける聚落の發達と其の地理的條件との關係を究明せんとし、研究を先づ四國に始むるに當り、其の關係の比較的簡單なる場合を觀んには須く時を古代に溯るべしとの考定より試みに和名抄時代に於ける郷の發達と其の地理的條件との關係を見る事とした。

和名抄の郷が現今の何れの地に該當するやを決するに當りては主として邨岡良弼氏の日本地理志料に據り、又吉田東伍氏の大日本地名辭書をも參看したが、其の決定には比較的嚴格なる態度を持し、邨岡吉田兩氏が共に和名抄の郷を現今の比較的廣汎なる地域、即ち一村若しくは二村或は其れ以上に當て、又郷中現今の何れの地に該當するや全く未詳のものは之れを措き多少の手懸りを存するものは凡て考證を試み之れ

を現今の地に當てられたるに對して、余は古郷中明確に現在の大字、小字若しくは小村に其の遺名を存するもの及び邨岡氏の考證により現地との關係一見明瞭となれるものゝみを捨ふ事とし、五萬分一地形圖上及び、二萬分一地形圖の作成せられたる地方に於ては、二萬分一地形圖上に於ける（四坂島圖幅中要塞地帯に屬する部は不幸見るを得ず、又伊豫國野間郡大井郷即ち現今大井村の位置する部も同様要塞地帯に屬し五萬分一地形圖を見るを得ない）當該地名の周圍に朱を以て一圈を劃し之を以て古郷の位置を指示し（現今古郷名を傳ふる大字、小字、若しくは小村は勿論必ずしも和名抄時代の郷の全體ならず、或は古郷の一部なるやも知れず或は大部なるやも知れず或は又全部以上なるやも知れず

古郷が實際如何なる範圍に互れるかは尙今後の研究を俟つて明かなるべき事であるから今は此の問題に觸れないとして、兎に角古郷名を存する現今の大字、小字若しくは小村或は古郷の位置に存すると思考せらるゝ其れ等が大體古郷の位置を示すは明かであるから此の方法は大して誤つて居ないと思ふ)尙之れを二十萬分一帝國圖に移し以て概觀に便ならしめた。

郁岡氏の考證により其の現位置明瞭なるものとして拾へるは名方西郡土師郷、名方東郡名方郷、勝浦郡託羅郷、寒川郡造田郷、神埼郷、多和郷、山田郡喜多郷、香川郡井原郷、笑原郷、

刈田郡柞田郷、姫江郷、宇摩郡山田郷、津根郷越智郡櫻井郷、拜志郷、立花郷、安藝郡奈半郷土佐郡朝倉郷、高岡郡吾川郷、三井郷、幡多郡鯨野郷、宇和郷の二十二郷であり、尙讃岐國那珂郡垂水郷に該當する現今の垂水村、土佐國香美郡石村郷に該當する岩村、及び同長岡郡大角郷に該當する大津村は何れも小村にして大字即村と思考せらるゝを以て之れを拾へる事を前記して今參考のため古郷名と、古郷名を傳へ若しくは確かに古郷の位置に存すと思考せらるゝ小村大字小字名とを對照すれば次表の如くである。

和名抄國郡郷名 現今地名
 阿波國 板野郡 松島郷 津屋 高野 小島 井隈 井上

山下 全戸(余戸カ) 新屋 阿波郡 高井 秋月 香美 拜師
 土成村秋月 市香村香美(今市場町香美)

美馬郡 三好郡 大村 大島 三好 三好 三好 三好

江原村拜原 三島村小島

古代四國の聚落に就いて

麻殖郡

山瀬村忌部

桑川村川島(今川島町川島)

山瀬村湯立

高志村高磯、高瀬、北高瀬

高川原村天神

高川原村櫻間

國府町府中、東名東、西名東

新居村北新居、南新居

八万村下八万、上八万

勝浦郡

多家良村宮井、小松島町新居見

那賀郡

大野村上大野、中大野、下大野

坂野村坂野、平島村原

和泉

和射

讃岐國

大内郡

引田村引田浦(今引田町引田浦)

白島村白島、福榮村入野山、福榮村譽田山

寒川郡

石田村石田西、石田東、長尾村長尾東、長尾西、長尾

第四卷

第三號

三〇 三〇

造田

造田村野間田、下所、鴨部村鴨部中筋、鴨部東山、鴨部下庄

神崎村山崎、志茂村志度(舊名多和)、(今志度町志度)

井戸村中井戸

下高岡村、氷上村上高岡

氷上村上

田中村田中

平井村井上、平井村池ノ戸、幸禮村原

東植田村東植田、西植田村西植田

西植田村池田

坂上村坂元、十川村東十川、西十川

三谷村西三谷、林村上林、中林、下林、川添村元山

古高松村古高松
 木太村本村
 香川郡 大野村大野
 大野 由佐村由佐
 多肥 多肥村上多肥、下多肥
 太田村太田
 高松市
 高松市 鷺田村坂田
 坂田 一宮村成合
 成相 川岡村川部
 河邊 檀紙村中間
 中間 絃打村復田
 飯田 百合村(今佛生山町百相)
 百相
 篠居
 阿野郡 端岡村新居
 新居
 山田 山田村山田下、山田上、
 大山田
 羽床 羽床村羽床下、羽床上村
 羽床上
 甲知 賀茂村鴨ノ庄、本鴨
 鴨部

古代四國の聚落に就いて

加茂村上兵部、下兵部
 山本 林田村上林田
 林田 長炭村長尾
 鶴足 長尾
 小川 法勵寺村東小川、川西村
 西小川
 井上 栗熊村栗熊東、栗熊西
 栗隈 坂元村東坂元、西坂元
 坂本 川津村下川津
 川津 飯野村東二、川西村西二
 津野 川津村津ノ郷
 那珂郡 神野村眞野、西眞野、上
 眞野 眞野
 吉野 吉野村吉野上、吉野下
 良野 高篠村西高篠、東高篠
 子松 象郷村上櫛梨、下櫛梨
 高篠 垂水村(小牧曰此村甚小
 櫛無 垂水村)
 垂水 龍川村木徳
 喜徳 郡家村那家
 那家

柳原 六郷村上金倉、下金倉
 金倉 智多
 度那 善通寺町生野
 生野 善通寺町上吉田、下吉田
 良田 豊原村葛原
 葛原 四箇村三非
 三非 吉原村吉原
 吉原 筆岡村弘田
 弘田 筆岡村中村
 仲村
 三野郡 勝岡村下勝岡、上勝岡
 勝岡 勝岡
 高瀬 上高瀬村上高瀬、下高瀬
 熊岡 財田大野村大野
 大野 桑山村下高野、上高野村
 高野 本山村本山
 本山 託岡村託岡
 託岡 山本
 山本 辻村山本
 紀伊 紀伊村木之郷
 伊田 柞田村山王、黒淵

地球

坂本 高屋 姫江

高室村高屋 豊濱町姫地、姫濱

伊豫國 宇摩郡

山田 山口 津根 近井 餘戸 新居 井上 島山 立花 賀茂 神戶 周敷郡 田野 池田 井田 吉井 石井

金生村山田井 妻島村山口 津根村東村、西村

玉津村下島山

田野村北田野、田野上方 福岡村池田

周布村吉田

第四卷

神戶 餘戸 桑村郡 龍田 御井 津宮 越智郡 朝倉 高市 櫻井 新屋 拜志 給理 高橋 鶴部 日吉 立花 野間郡(濃溝郡) 宅万 英多 大井

德田村古田

上朝倉村朝倉上、下朝倉 村朝倉下、朝倉南、朝倉北

富田村高市

櫻井村櫻井濱(今大字櫻井)

清水村新谷

富田村喜田村、上神宮、德久

日高村高橋

鶴部村小鶴部

日吉村日吉

立花村郷

乃万村宅間

乃万村阿方

大井村(今大字大井濱)

第三號

波止濱村高部 龜岡村佐方

粟井村粟井小川、粟井坂

歌仙村高田

難波村上難波、下難波

立岩村中村

那賀 和氣郡 高尾 吉原 姫原 大内 温泉郡 桑原 壇生 立花 井上 味酒 久米郡 天山 吉井

御幸村桑原

潮見村大内

桑原村桑原

垣生村西垣生、中垣生、東垣生

素鷄村立花

朝美村味酒

石井村天山

石井 浮穴 井門 拜志 桂原 出部 伊豫 神前 吾川 石田 岡田 神戶 餘戸 喜多 矢野 久米 新屋 宇和 石野 石城 三間

石井村西石井、東石井、
居相

余土村余戸

浮穴村井門

拜志村上林、下林
荏原村蕪原町

北伊豫村神崎
郡中町下吾川、上吾川

神山村矢野町

新谷村新谷、新谷町

笠置村岩木

古代四國の聚落に就いて

立間 土佐 安藝 奈半 室津 安田 丹生 布師 和食 黒島 玉造 香美 安須 大忍 宗我 物部 深淵 山田 石村 田村 長岡

立間尻村立間尻

土佐國

奈半利村奈半利

室戸村室津（今室戸町室津）
安田村安田

和食村和食
安藝村黒島
土居村玉造

夜須村夜須、上夜須、夜須川

香宗村曾我
三島村物部
佐古村深淵

山田町山田
岩村（小牧曰此村甚小村）
田村本村、前濱村下田村

登利 江村 宗部 大角 片山 氣良 篠原 大曾 土佐 高坂 朝倉 神戶 吾川 仲村 桑原 大野 次田 高岡 高岡

久禮村植田

江村江村

大津村（小牧曰此村甚小村）
三和村片山

介良村本村、介良野
大篠村篠原
大篠村大堀野（今大埔）

小高坂村、高知市（舊大高坂）
鳴田村鳴部

朝倉村宮ノ前、宮ノ奥（小牧曰宮朝倉神社）

高岡町高岡

三三 三三

アヅ川 海部 三井
アヅ川 海部 三井
川内村波川
新居村新居

ハタタ 幡多郡 大方 鯨野
清松村伊佐

山田 山奈村山田
ウツロ 宇和 中村町不破

前掲の表によれば和名抄に見ゆる郷中之を現今の何れの地に當つべきや不明なるものは阿波國に於ては九郡四十六郷中二十六郷、讃岐國に於ては十一郡九十郷中十三郷、伊豫國に於ては十四郡七十二郷中二十八郷、土佐國に於ては七郡四十三郷中十四郷であつて、之れを百分比にて示さば阿波國に於ては百中五十五、讃岐國に

於ては同十四、伊豫國に於ては同三十六、土佐國に於ては同三十二、之れを四國全體として見れば二百五十一郷中不明なるもの八十一郷、即ち百中三十二、換言すれば全體の約三分一弱である。

尙之れを國郡別に示せば次表の如くである。

國郡名	郷數	不明	百分比
阿波國	四六	二六	五五
板野郡	九	九	
阿波郡	四	一	
美馬郡	四	二	
三好郡	三	三	
麻殖郡	四	一	
名方西郡	四	一	
名方東郡	六	二	
勝浦郡	四	二	
那賀郡	八	五	
讃岐國	九〇	一三	一四
大内郡	四	〇	
寒川郡	七	一	
三木郡	八	〇	
山田郡	一	二	
香川郡	一	二	
阿野郡	九	一	
鷯足郡	八	三	
那珂郡	一	三	
多度郡	一	〇	
三野郡	七	七	
伊豫國	七二	二八	三六
刈田郡	六	一	
宇摩郡	五	二	
新居郡	六	五	
周敷郡	七	四	
桑村郡	三	二	
越智郡	一〇	一	
野間郡	五	〇	
風早郡	五	一	
和氣郡	四	一	
瀧泉郡	五	二	

久米郡	五	二	土佐國	四三	一四	三二	吾川郡	四	四
淨穴郡	四	一	安藝郡	八	二		高岡郡	四	一
伊豫郡	六	四	香美郡	八	一		幡多郡	五	二
喜多郡	三	一	長岡郡	九	二				
宇和郡	四	二	土佐郡	五	二				

上掲の表によつて一層明かなる如く郷名の滅びたるものは阿波に於て最も多く、伊豫土佐に於て稍少く讃岐に於て最も少きが其の原因は奈邊に存するや今は詳でない。阿波國殊に板野郡に於て多くの郷名の滅びたるは恐らく吉野川下流に於ける河道の變遷による聚落の破壊移轉等の原因によるものと思はれ、其の他の地方に於ける郷名の消滅も又其の地理的條件と關連する所少くないと思はれるがその究明は尙今後の研究を俟たなければならぬ。聚落の消滅、少くとも聚落地名の改廢と地的條件との間に何等かの關係はなきや、地的條件とは必ずしも河道變遷のみに止らず幾多の條件の結合であり得るが其れが何であるかの究明は將來研究の一題目である。

聚落の消滅或は聚落地名の改廢が何によれるかは他日の研究に譲るとして兎に角四國全體に於ける二百五十一郷中八十一郷を除く他の百七十郷は稍確實に今日の略何れの地點に該當するや之れを明かになし得るのであるが余は之れを五萬分一地形圖及び二十萬分一帝國圖上に示したる後古郷の發達と其の地理的條件との關係を究めんと欲し先づ其れが地形との關係を明かにせんがため五萬分一地形圖に於ける百米等高線を辿り二十七圖上に於て之れを褐色に着色し平地と急斜面との區別を明かにせる結果此所に顯著なる事實が明かとなつた。即ち丸龜圖幅内に於て長尾(鵜足郡長尾郷に當る)眞野(那珂郡眞野郷に當る)松山圖幅内に於て中村(風早郡那賀郷に當る)が百米以上、川上圖幅内に於て下林

(浮穴郡拜志郷に當る)が百米の地點に位する外他の凡て、即ち百七十郷中百六十六郷が凡て海拔百米以下の平地に位し、該四郷の位する百米以上の地と雖も殆んど平地と見做し得る所なるの事實之れである。

百米以上若しくは以下と云ふが如きは決して重要な問題ではない。四國の如き島國にあらずして海岸よりの距離大なる地方に於ては百米以上の地に尙多くの平地が存し此所に數多の聚落が發達し得るのであるから今四國の場合に於て百米以下なりや以上なりやは然かく重要でなく寧ろ平地なりや否やが問題となるのであるが古代四國の聚落が多く平地に發達せるの事實は先づ顯著なる事實としなければならぬ。

此は云ふまでもなく一には平地が耕作に適し最も生産的の地にして衣食の資料を主として農業に仰げる住民の居住は此の地に於て最も便なりしにより又一には平地の一部たる海岸地方が漁撈による生活に甚だ好適なりしによる。其の他尙種々の原因にもよらうが兎に角古代四國の

聚落が多く海岸地方の平地に集中せられ山地に稀薄なりしは地理上より見て甚だ興味ある事實である。

平地に人口、從つて聚落が集中し山地に之れが稀薄なるは現今の一般情態であるから其れより推して古代、聚落が海岸附近の平地に集中し山地に稀薄なりしは何等不思議の事實でなく之れを顯著な事實とは云ふに足らぬのであつて唯古代の聚落を確實なる地圖上に記入し其の一般の分布を概観する時今更の如く顯著なる事實として感ぜらるゝに過ぎないのであるから實際は今までに出でたる結果は寧ろ當然の結果で極めて平凡なる事實の明示に過ぎないのであるが然しながら兎に角上述の結果で古代四國に於ける聚落の分布は大體明かとなり之れを以て古代四國の聚落地理は其の概論のみは構成せられたる事になるから今後は郷の分布發達と一般地理的條件例へば地質地形氣候水理等種々の條件との關係を究め同一平地に於ても各地方により聚落密度に差異ある所以を明かにし尙進んでは各聚

落の發達と該地に於ける特殊の地的條件との關係を明かにし如何に人類が其の地的環境に影響せられ、之れに順應し若しくは之れを支配したるかの特別なる場合を研究しなければならぬ事

關東大震災と神戸港

となつた。今日は漸く基本的準備的作業を終れるに過ぎないのであるが作業中氣付ける考へ的一端を録し以て後日の研究に資せんとするのである。(一九二五・六二)

西 龜 正 夫

大正十二年九月の關東大震災が、神戸港に如何なる影響を及ぼしたかと云ふことは、興味ある一題目たるを失はぬ。而してそれは、簡單に云へば横濱の衰頹に代る神戸の興隆であるが、詳細に觀察すれば、その間に又種々の問題がある様である。

本篇には主として大正十一年以後三ヶ年の統計を引用する。震災は大正十二年の九月一日であつたから、十二年の統計には震災前の状態と震災後の状態とが、二と一の割合で混入相殺し

て表はれて居る筈である。

元來横濱、神戸の兩港が我が國貿易界の二大關として東西に雄視して居ると云ふことは、僅々二三十年來のことで、明治の前半に於ては横濱の盛況に比して、神戸の微々たる状態は到底比較にならなかつたのである。即ち明治元年に於ける貿易額を見ると、横濱は全國の八割を占め、神戸は僅かに四分を占むるに過ぎなかつた。明治三年以後神戸の進境稍著しく、六年には輸出入總額に對して、横濱が七割一分、神戸